

楊 夢 (ヨウ ユメ)

中国出身

日本女子大学 人間生活学研究科 博士課程

冬の思い出

11 月に入り、天気は大分寒くなりましたが、たまに温かい天気もあり、時々、半袖のシャツを着る子どもたちが公園で遊んでいる様子も見えます。私は、最初東京に来たときに、季節の変わり目に不慣れでした。なぜなら、私のふるさとである、中国の北方にある山東省で、今の時期はもう、ばっちりの冬になっています。昔にあまり注目していない、好きではないあの厳冬は、今思い出すと、なぜか郷愁の気分になりました。

私の故郷は、春、秋の実感があまりなく、一年中のほとんどの日は、夏と冬の2つの季節に占められている小さな地方都市です。10 月、國慶節連休明けから、すでに寒い日々になり、私たちは厚い上着を着はじめ、4 月まで、それを脱ぐ日は数少ないです。一番心に残るのは、中学 2 年か三年の 12 月のある日、一晩大雪がふり、朝起きたら、雪は 20 センチ以上に積もって、学校行きのバス停までに、ずっと左足を深雪から抜き出して、前に一歩踏んで、また右足を抜き出す作業の繰り返しをしていました。学校についたら、まずは全員でキャンパス内の除雪です。最初はまだきちんと箒をもって雪かきをしていたが、いつの間に、スノーボールが投げられてきて、「お返し」に、もっと大きいのを作って投げ返して、みんなの雪遊びになりました。その後、誰かがデカイ雪だるまを作って、ニンジンと石で五官をつけてあげました。誰かが大きな板を探してきて、坂道の上から「ス

キー」して……あの日の楽しさは、私の記憶の中にずっと残って、故郷の「印」のようなものになっていました。

もう 1 つの冬に関する思い出は、餃子です。ネット上に、このような冗談話があります。「(中国の)北方地域は、どんな節分でも餃子を食べる。」それは当然、誇大で言っていますが、北方の人が餃子に対する深い感情は否定できないものです。小さい頃、春節(旧暦新年)のとき、家族のみんなが集まり、お母さん、おばあちゃんと一緒に大きいテーブルを囲んで餃子を包みながら話をします。お母さんは「〇〇ちゃんは、大人が餃子を包むテーブルのそばでも宿題をしているらしいよ」と、私の勉強意欲を励まししようとしましたが、私は「今日は新年だよ、特別だよ」と笑いながら、従妹と一緒に生地を粘土として遊びを始めました。あの餃子は今でも懐かしく、東京に来てから、何回も作って試みたが、自分で「皮」を作れず、スーパーで買ったもののほとんどは、水餃子の皮ではなく、焼餃子の皮であるため、食感はやはり違いがありました。なかなか記憶の中の餃子を作れず、私は、とても遺憾で、自分が作った下手な餃子を食べるたびに、故郷を懐かしむ寂しい気持ち湧いてきます。

冬は郷愁の季節。なかなか帰省ができない時期のこの冬、故郷から送ってきたお茶を飲んで、自分で包んだ餃子を食べ、この郷愁を癒しています。

以上



▲自分で作った水餃子(写真 2 枚)